

米国における能楽研究の実態と

私の能狂言を中心とした演出活動（7）

——一九六〇年代から20世紀の終わりまで——

アンドリユー・T・椿

D. 狂言「清水」と能「藤戸」——一九八五年一月に公演

前書きが長くなった、一九八五年の能狂言の始めての公演について、書かせてもらいます。この年の一月二二日から二四日までの三日間、金、土、日とカンサス大学で公演、その後、いつもやるように、この近辺の大都市になるミズリー州のカンサス・シチーで、二月一日に公演、その前日に同じ州のカンサス・シチーの東隣になるインデペンダンス市（トルーマン大統領の出身地として有名）でも特別公演をしました。自動車で一時間ちよつとで来られるカンサス市なのですが、そこに住む人達にそうした時間を使って大學のあるローレンス市まで来て、私たちのやる劇を見ていただくことは難しいので、こちらから出て行って、特別公演をするわけです。自分たちの住む市内なら、四分、五〇分かけてでも出てくる、或いは、有名なカンサス大學のバスケットボールとかフットボールの試合ならそ

うした時間を掛けることをいとわずに出てくるという、おかしな価値観の影響で、こうした訪問公演をいとわずにする訳です。幸い、能狂言の公演には、大がかりな舞台装置もありませんし、カンサス市のネルソン美術館は、私が世話をして、以前にも日本からの劇とか、音楽とかを上演させてもらったことがあるので、場所代を払うとかもしないで、余り高くない入場料を取って、公演できました。

能を見つけている人なら、私が先に触れたように「藤戸」という作品が、能には珍しく平民の苦しみを取り上げた話だということに、気が付いたかも知れませんが、こちらの一一般の人々には、こういう話なのだそのまま受け入れてくれたと思います。私が先に指摘した、平民である主人公の幽霊が、刀を何度も胸に突き刺す瞬間を見せる、この能の特別に迫力のある場面など、其れ相応にリアルに取ってくれたと思います。少し能のことを知っている人は、この作品のそうした生々しい迫力に驚いたことと思います。

一方、狂言の「清水」は、如何にも狂言らしい作り方で、召使いの者の気配りで主人が簡単に出てきた鬼に騙されて、其れを確かめに戻る召使いを、主人がまともに止めようとするとところとか、鬼に化けた召使いが、主人がすでに企みと見抜いて、太郎冠者の本体を暴こうとしているのに気づかずに、鬼の振りをし続けるところとか、如何にも狂言的なおかしさに徹底している場面がいろいろあり、役者の狂言師としての強さが出せるように作られているところに、この作品の巧みさが見られます。

このプログラムに見られる能の人間性を鮮やかに描き出すところとか、狂言の一見単純な構成が、その裏を取り出すことによって、深みのある笑いを作り出しているところとか、日本の古典劇の、表面的に統一された様式を通して、思いがけずに深い味わいを発見できるところに、このプログラムの面白さを見出した劇通も何人かいてくれたのではないかと、私の期待を高めたことです。

能や狂言については、歌舞伎同様に一九六八年にカンサス大學で教え始めてから、何回かクラスで教えてはきまし

たが、一九七〇年になって始めて演出した Kyogen:Comic Theatre of Japan 「狂言：日本の喜劇」と言うプログラムで「附子」、「鎌腹」、そして「鈍太郎」の三つの狂言を手がけたわけです。これは勿論万作師に勉強させていただいた、一九六九年夏の経験を基礎にしてした仕事です。(第一〇号を参照してください。)

この後では、第一一号で説明したように、歌舞伎の「勸進帳」をやったり、学生に自分たちで書いた 能や狂言を演出させたり、インド演劇や舞踊の勉強にインドに行ったり、シエクスピアの「リア王」を演出したり、いろいろ他のことで忙しくしてきましたが、いよいよ一九八五年になって やつと「清水」と「藤戸」を手がける所にたどり着いた次第です。

狂言の演出はすでに自分でも何回かやってきていますし、学生達の仕事にも手を貸してきていますので、特に緊張することもありませんでしたが、「藤戸」を取り上げて 始めて能を演出するということは、特別の心構えといろいろな準備を必要としました。能を取り扱うことは当然、ただの動きとか台詞をいうだけでなく、その台詞が謡がかりになり、その動きが舞になるわけで、それに加えてその総てに囃子がかかわってくるのですから、狂言の持っている問題点が急に三倍も四倍もの複雑さをもってきます。従ってこうしたものを初めて勉強する者達を指導して、それなりの形を持ち、それに能的なゆつたりしたペースが、其のペースでなければならぬ美しさを持たせなければならぬわけで、私が一九六九年に四週間四郎師から能を初めて教わり、一九七四年から七五年の一年間毎週一回勉強させてもらった、その限られた知識と経験を如何に活用しなければならなかったか、今考えても、よくやろうとしたものだと、吾ながら驚かされます。やってみたいという意欲が、是非見せたいという望みに発展した、知らず者の糞度胸でも言うほかないでしょう。

歌舞伎の「勸進帳」を一九七三年にしたときには、四ヶ月ずつの秋と春学期を殆どフルになるほど使い、公演は四月半ばにしていますので、稽古に約八ヶ月近くかけたわけですが、この能狂言の公演のためには、一九八五年の一一

月末近くに幕を開けることにして、配役を決めるためのオーディション(一般公開の応募者審査会)が秋学期が始まると直ぐにあるので、それに参加して、私が何をしようとしているかも余り知らない者達も混せて、「清水」のために三人、「藤戸」のために五名の役者と、一人の後見、それに五名の地謡方を選びました。狂言方の二人の男性は、能の方でも役を持つてもらい、八名の役者のうちの二人は二役を兼有させることにし、大学院生が四名、地謡方の二人も大学院生というように、大変特別なことをすることに参加するのだという心構えを持った者達が、集まってくれました。

この選ばれた者達の稽古時間は、実際の上演に関する必要なことを勉強するために使うので、毎週月曜から金曜まで、夜の七時から一〇時近くまで稽古時間で、日によつて狂言を稽古、他の日には能の稽古、それも早い頃は、シテとワキだけとか、ある日の前半は、地謡方の稽古日とかいろいろ工夫をして、始めの頃は、自分たちで自習する時間を与えることまで計算して、稽古に出てきて、他の者が忙しくしていても、自分はぼんやりと自分の番が来るのを待つていふと言ふことが余りないように稽古内容を組織立てて作りました。私としては、この学生達が稽古をとうして限られた日本の古典演劇を勉強するだけでなく、もっと一般的な日本の古典演劇についても勉強してもらいたいと考えて準備した *Styles of Acting: Classical Japanese* (日本古典演劇演技様式) というコースを(第一〇号を参照してください) 日中週に三回、一時間ずつ、稽古の始まる八五年の秋学期の始めからとってもらい、そうした知的な必要事項も勉強してもらいました。従つてこのプログラムに協力してくれた者達は、いろいろな勉強をし、又稽古を重ね、昼から夜まで、大変な努力をして公演のための準備に参加してくれたわけです。

一九六八年にこのカンサス大學で教え始め、それから一七年たったところで初めてやる能なのですが、協力してくれた学生役者も一応ただ珍しいことをするというだけでなく、大変特別なプロダクションに参加するのだという気心を持つて参加してくれたように思います。「藤戸」の佐々木盛綱の役をしたのは、カンサス大學のあるローレンス市に、

米国のインデアンを集めて大學教育をしているハスケル (Haskel College 今は University) の二年課程を終えて、カ
ンサス大學の演劇科に三、四年と勉強するために来た男性で、そのインディアンの容貌が、少なからず日本人的な顔つ
き、身体つきに似ていて、なかなか適役でした。漁師の母親の役をした女性は、四〇近い感じの大学院生で、日本の
なものを愛し、自分から進んでこの役をやるべく買って出てくれ、この後で、一応大學在学中にする必要課程を終え
たところで京都に移り、英語を教えながら、日本の生活を楽しみ、博士課程も壬生狂言の研究をして博士論文を書き、
わたくしが指導して長年かかってやっと博士号を取ったのですが、数年前に健康を崩し、米国のシアトルに戻って、
まもなく亡くなりました。この女性のした母親役は、その年功から真に適役で、良くやってくれました。地謡い方の
リードをしてくれたのは、やはり博士課程にいたオペラを専門とする男性で、その素晴らしい声で皆を励まし、大い
に活躍してくれました。この歌手は「勸進帳」をしたときにも長唄を唄ってくれて、助けてくれました。

さて地謡をどうしたかということですが、これは東京で地謡のテープを録音したときに、既に囃子方の分の音楽と
謡方の分とは、同時ですが、別々のトラックに録音してあったので、役者の方も謡方の方もこのテープを聴くこと
によって、囃子との相関関係の密なることを勉強し、始めは日本語で謡っている謡方に合わせて謡い、次に英語で謡い、
最期には日本語の謡の分は取ってしまい、自分たちだけで、囃子に合わせて英語で謡うところまで持つていったわけ
です。シテなどの場合、謡がかりになるところは自分だけで囃子にあわせて英語で謡う所まで持つていきました。勿
論、台詞の部分も、謡がかつた調子のあるところは、それなりに英語に節を付けて、謡わせました。

地謡方を、日本の能でするように、舞台の脇正面に向いて舞台の横に並ばせるのは、謡の音量が適当に正面に流れ
ないと言うおそれを感じ、囃子方がいないことと合わせ、地謡方を囃子方の席に移し、彼等の声が真っ直ぐに正面に
向けられるようにしました。こちらの舞台では、能の脇正面のように、橋掛かりに添って広がる脇の観客席がないわ
けですから、脇正に向かって謡うと言うことに意味がありません。又、「勸進帳」をしたときに、こちらの役者は正座

になれていないので、長いことそうしていられないことを認め、歌舞伎の長唄連中がやるように、一人一人に小さな箱を作り与えました。この箱を、私の長唄連中は手に提げて、劇が始まる前に席に着き、その時にその箱を、お尻の下において、公演中に脚が痛くなることを避けられるようにしたわけです。これを地謡方もした次第です。勿論皆袴をはいていますから、この箱は完全に隠れて、目にはつきません。

動きは四郎師に教えて頂いたときに八ミリの映画に撮ってあったので、大事なところはそれを見せたり、日本の外務省が以前作った三〇分ものの能の映画の最初のところに、「藤戸」の大事な場面が良く入れてあったので、それも見せて、勉強の助けにしました。勿論、そうして勉強した後で、私が指導してダメ押しをし、納得のいくところまで持っていくわけです。映画などでは、シテとかワキの動きの大事なところは良く見せてくれるのですが、その他の所は勿論入っていませんので、そういうところは、私の勉強した結果をもとにして指導しました。私が「藤戸」の映画を見て感銘を受けた所を思い出しながら、一介の漁師がシテで、立派な武士の佐々木盛綱がワキという珍しい構成をもつこの能のユニークな特徴が観客に分かつてもらえるように努めました。

能をやるに当たって、当然能面を使用する必要があるわけで、それをどうしたかと心配されている方もあるかと思えます。その方も先見の明があったというか、大変都合な、全く予期しなかった幸運があつて、この「藤戸」での必要は上手く解決されました。私が一九六九年の夏に初めて帰国する機会を得て、狂言、能、歌舞伎と猛勉強したことは、第一〇号でふれましたが、その折りに、野村万蔵師の面作りのお弟子さんと、良く出入りをされていた「けんぎょう」（どんな漢字を使うのか失念しました）と言う先輩の方がいて、私が面に興味があり、幾つか求めて帰りたい由を申し上げたところ、万蔵師の奥様がそのお弟子さんと私を取り結んでくださり、その方から私が支払えるようなお値段で、立派な「深井」と「瘦男」を分けていただきました。この両方は、「藤戸」の前シテと後シテが使うもので、丁度私が興味を持った能に使えるような面を分けて頂いたわけです。その後又別の折りに、「清水」をやることにはつ

きりしたところで、確か浅草の店の一つにあったプラスチック製の、離れてみれば、一応それとして通れる「武悪」の面を一つ求めました。この方の質は、「深井」や「瘦男」の比ではありませんが、「武悪」は狂言に使うのだからというようにいいわけを自分にして、使いました。

面の話を続けさせていただと、私が持っているものは、その他に四郎師から頂いた、師がお使いになった「小面」があります。一九九〇年に私の住むローレンス市と日本の湘南の平塚市とが姉妹市として結ばれることになり、その平塚からちよつと大磯に近い所にお住まいの能面師の高津紘一氏を松田存先生から紹介していただき、そのお方の作品である「阿波男」と「空吹」をいただいて大事にしております。もう一つは、一番始めに私の持つことになった能面ですが、これは「翁」の面で、私がイリノイ大學の博士課程で師事していた、能のことを戦後の早い時期に博士論文として書いた、ジョゼフ・スコット (Joseph Scott) 先生から頂いたものです。彼が一九四五年の第二次世界大戦が終わったところで進駐軍の若い将校として東京に来て、能に興味を持つことになり、帰国してからシカゴの小さな日本人街にあった日本品を扱う店で求めたものだと思います。この面が掛かっている先生の書齋で、私は彼の能に関する研究を援助するための研究カード作りを二年間、研究助手としてやったので、私が博士号を得た折りに、その記念として私に下さった、本当にめでたい「翁」面です。(第七号で私とスコット先生の関係を述べています。)最後の物は「般若」の面で、これは壁掛けようにプラスチックで作られ、ちよと凄みのある灰色に近い色で塗られていて、見た目の良い木材の壁掛け用の額といったものに掛けられるように作られていて、これは純粹に裝飾用に作られた物でしょう。大分前に、カンサス市に住んでいたアメリカ人の友人の一人に頂いたものです。この面はそのまま壁に掛けてありますが、他の面は総てきちんと袋に入れ、桐箱にしまつてあります。

衣裳や小道具はすでに「勸進帳」を上演したり、鎌倉の佐々木衣裳店との関係も出来ていたので、大事な足りない物は日本から取り寄せ、自分たちで作れる物は作つて間に合わせました。「藤戸」の母親が長い髪のカツラを必要とす

るので、これは東京のカツラを扱う店を教わって一つ求めた物を使いました。

地謡方の衣裳は「勸進帳」で五人分の長唄連中の衣裳を描いたので、それに手を加えて、何とか間に合わせました。歌舞伎と能とまぜこぜにしているで申し訳ありませんが、その辺のことは見てみないことにして、お許し下さい。こうして初めて上演した能が、どの様にとられたか、まあまあ一応それなりの効果はあり、同僚である他の演劇科の教授達や東洋文化言語学科の先生達もそれぞれ学生を連れて見に来て下さったし、カンサス市の日本人の友人達も何人かはわざわざ見に来てくれました。日本人は多少能が難しいとか、一般向けしないものだとか知っているだけに彼等を動員することは易しくありませんでした。でもこうして皆の哀愁感に訴えるところのある「藤戸」で見せた能の魅力が、その後の能の公演にそれなりの良い効果を上げてくれたと確信しております。

能をやると言うことは、狂言だけをやる時と違って、ただそうした劇を演ずると言うこと以上に、もつと本格的な日本文化を学び、それに生きるといった信念を持つて欲しいと思ひ、舞台の立ち居、座り方は勿論、着物を着ての動きを自分のもの出来るまで、いろいろ細かいことにも注意して勉強し、稽古をしてもらいました。皆も良く協力してくれて、私が願ったことは総て、上手く表現でき、上演に参加した者達は勿論、それを見てくれた人達も自分たちの仲間の学生がこれだけのことを一学期間の勉強でやり遂げたのだという誇りと、充実感を味わってくれたと思います。私としても勿論、初めて成し遂げた能の公演なので、其の満足感は又それなりに大事な充実したものでした。この成功感が私を更に助けて、それ以後の仕事の励みになったことは当然ですが、それについては又次号で取り上げます。